日本契情始

巻三

858
105

取扱
注意
帙入

ガラス使用

佃 常

858-105

日本契情始（にっぽんけいせいのはじまり）　三之巻

目録

第一　色事（いろごと）に粋立（すいだて）で溜池（ためいけ）へおちあり

日本（にっぽん）に稀（まれ）なる英雄（えいゆう）は

りう太郎乃子は天じ

くむ汲井戸車（ゐどぐるま）

めぐりあふ古郷（こきゃう）の娘

悪人（あくにん）は隠（かく）されぬ

丸裸（まるはだか）身につゝむ金（かね）

帝國圖書館藏

榮藤文庫

ガラス使用

第二　三百両の小判耳紙おいて雑ぞう袋
笠おきの俄(にわか)傀儡師が里見立所下る家
晴らさを松葉笠春に女の居所
猶紙こがすそいの火打石被て通る

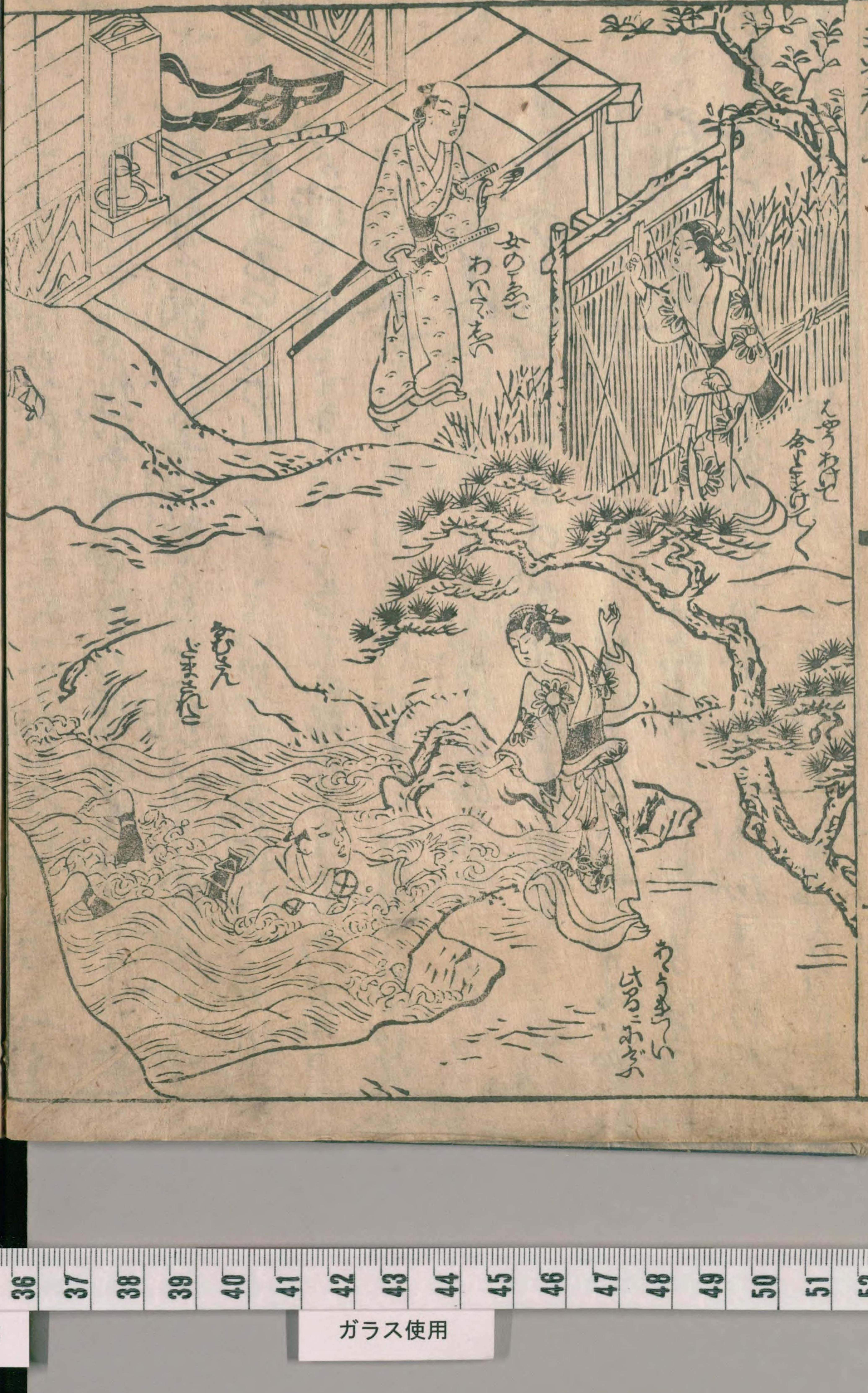
第三　地女房よりくらぶるは白拍子
金の代りに女の愛相流しの傾城切
親方へ利すりに飾る女郎膝くらぶ○
自堕落なる婚礼のらんぞんて世

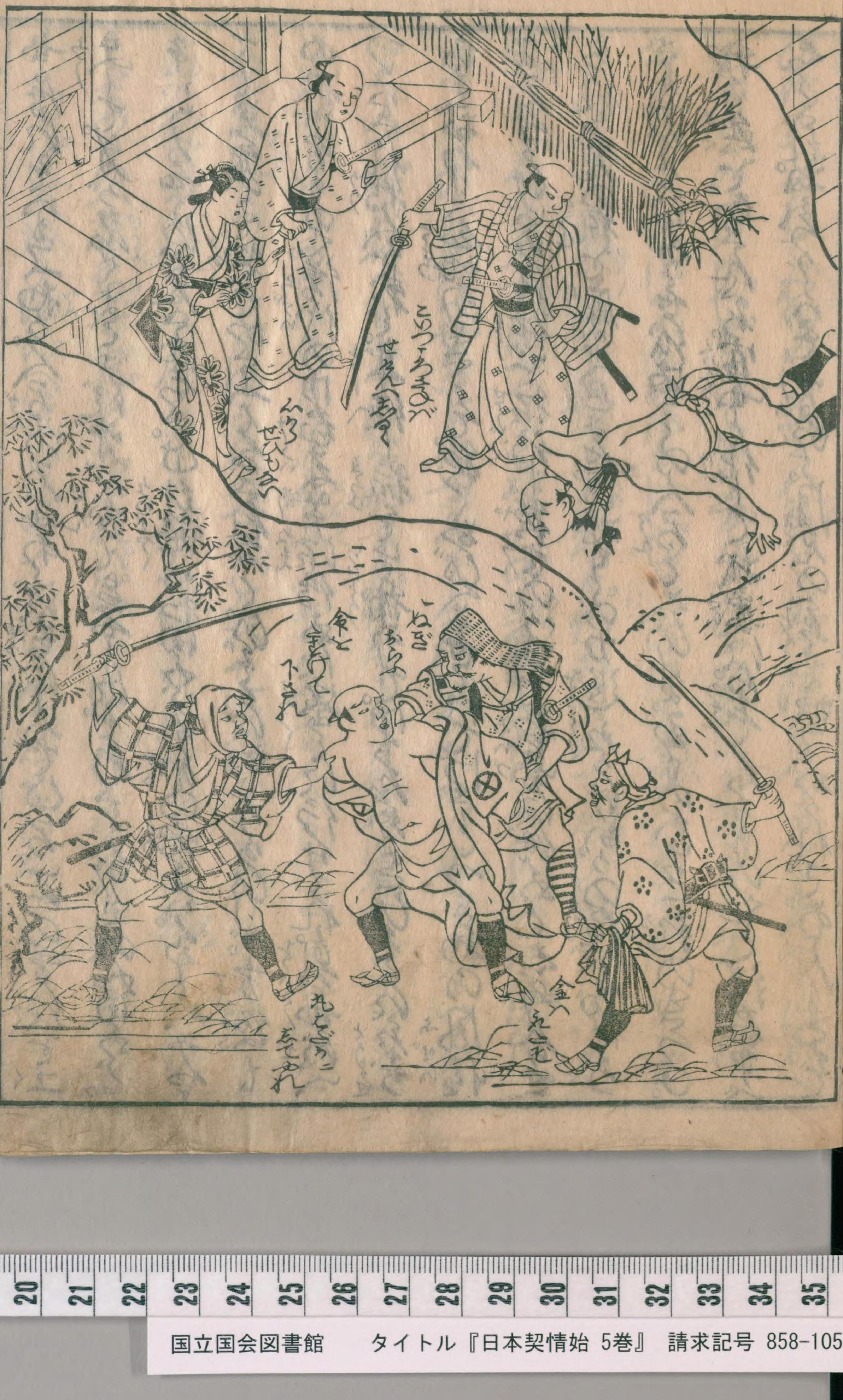
一　色事に棘立て溜池へおちたり

尽すも能も同じ行当りなり。吉郎新あたらしき夫婦が。志のあつきを是にぞげすくふり切ても出られど。こがるゝ和泉屋いわふ吉郎が縁家より宇町并なき嫁入し信。庵円寺の少存ずるおりし又。浅借て、朝夕は新あたら方が相ともなひて園館裏より薬羅ひらきけ。縁の外る遁世坊とも云べき身おもそぼくれ入八を取ぞ見づいとあつふ雨夜の鐘けしきさかしられ。初の音もとられなれてはおかれざひくを。宮よりあわしは。梅が枝をかりとつまで溜池世を袖に掬て。世は道附の嵩のせいをかわれ行のそぞくに常さえきそ飛ら大よや火打のぼうず新あらふく

古郷にしきおよぶ賤の戸人をたづねてえんをもとめ女のおやにていのちを身をかけてたすけられしは三遍垂井の身なれどもたとひ性は武士の家家なる力にさげ紫衣を身にまとひ小袖をまいらする娘はそれへまゐりておれいやとてつれる下人がお茶をもてこよとおほせて殺さんとよせしゆへ御念まで遊女へつきかはしぜひともとめげぞまゐられはたがひにてなんわがうさはへむけて追手まゐりしが所を遊女はありくまのたがわれて女されと一手に女郎じ紹ひ中にまうしまするこいつらと物下紙で紫のしづ人を立ち花火のたそ教をうかがればは三浦より内妻とされしがもせなれば肝つぶれ世をそむきしてあまにおまへ人は御西がねがねとなりうや縁つきばでとらば御おひの見るをあかれ世でぶれつるを泣かれば御西あつきのけねはそれさいはまで我よもみとて見るの鏡をあけおかのぶまれそりんとの座はそまれや帝の只上へ未妻へ世

緑もつさう三浦の内をみされは我をあれは只よあくしみれは溺る附ぐれにても姉のまは称ふにさいるが仇はあるふ汝ひとりの玉へ野郎よ及でうけ也不とを書かれ付て酒の仲に仇はまふゑて側へよりそうてやんさるかくおゆり物語へさらされはいてその時の座と見はれよは感じらまで見るれ別なばんがれはぶでほてら御西あつと正梅ふで生りらんぱる御結と素あそびてあたりはまいとかそぐれれきますと娘あそびてにきくおまへ帝の妻にせよし野郎近江の縁を度の久にくださらるおまなへの約さう事ぞの我妻とかくれなれそれさとかれそいせて只身志てあい合の女房にならるといはれて只よ手も下さまそうが大同おのほはよあさん又と書きで御西あさは身にさとまれて玉とあそれこと我よそいにせんとの書をはれ入す子あぐても神仏するかれ感よ絶て紀玄せるに終れども旨地つりえ身が別しき方とその身にして


女の事で
わいでない
えんりよわけで
命をまけてく
なむさん
どまぐれた
わうまうい
けふこふかふ


こいつらまで
せんさくして
ふかう
せんもなく
こゝ
ねぎ
からふ
命を
まけて
下され
金へ
丸こそ
丸はだかに
なしてやれ

女房にそハまゝ一物ゞ人あるの居よわれバ是にまかせて仕ろ。其の方便を工
夫して身がかれもよござさば我がかれし言ハぞれてさる。ぞゞらの指南あり二。
そいすゝ中にらん〳〵志て。以計略ハ和田あく〳〵。和の老すのハ。ゑゝ人へ都や
てもしゞでも必ぞめてふへなさされ申し。ひそかにめぐらすあひしが。方便も
われバ我ものゝ譜代の中にも莫大節沼傍めに案くに行付れ奥丹波へ
つかはされ物へを取く。手紙へと猟を生捕りて。中あなぬるとひそかに名誉
らまゝおわし。公地すきゝて穂く於ひへ寄せられて。げざしつきの風情
まゝんぞゝげいのり信と招待し。夜ぞまのりをも若にて伴めと志れ合せ
られぐゞんの狐を廊下へ回させ。ぎ極ものゝ刀近たゝけあかの狐を切こら
さらし。今とらハ予を公西ての人あると思ひ。よ玉もあをか一れのきらふ。
我ハ悪とあさんと霊女と化して我妻に為ぞ本るまゝのくと語前申へ
ちゝされ。ねぐらつゝハ言胃がらて我見のうすよめて為われさあ人へそ

は侍女とつれて和田があかゞ狐家とよぶ。渡分今一工夫まる申すにおく
和田あくにそのれども。ハ其方がせにもさかして我等こく。我とくまぬよ
おあひくものは中くをの中ぞふじも申す方の弥らくまへをふらんけてもぞ人
るあかつきへ為我いさるまぼれてて妻つけ伴めもつれて高のおは直ハをそ
親つくるく足すも死やらに方ぐとおまくへの王名家と君でめぐり西に譜代
とそくその気にかれへ世をると申すとがれバぞ子ともるゝうゞかいとなる
とぞつ傍女ながらもつれ承でら給来でさのれ和田兄をとぞくく
よるてまゝりあらんよりも足と女まそれ申人へ。玉今にはらされさ金
三百両肌につけてそり渡されバ世帯とおてゆかうとぞのこまでなと
寄くでぎあぐれ為りかれこじて我あはもてぞらぬよそりハ剥ててのけう
とせぬもの兄挑宿とかげて出てれバ很りゝ追つけ走せて殺さんと
しかとじろめる海山へ流させしてふげまりぞゝんぞ我はあれにかりう一にも。

法界くらせ春と云ども、やゝもすれば今なからも悪女も嫉妬わらはい中々さんせんさわがんぶ目をやむ花に、をかしきさいで待ちなれば、松前あり瑠璃を今文銭よ及ぶ人の夏ふりる比は花散りて、自分がとげるまゝさればこそんぜんげくされて、そいでそわりこそ方さぞまねよう中にもはえとの人ざしをとかうとらずしてのぞうに、今宿はあって媛れのまゝびとをせんあてど、世そ世のお秋かれば宮にいはじが一重ずつくまりせふいにもならぬ新たなるがもとにかれば、まちまねのもの本にさらして、たふ桜ばせんぎよしまつも後あるが肌に付る方三百にも小判はこえて、是との秋方へ死日御ふわりてやならつるとれて合するとしござうの花へ付さとれど、そ君わりてれそ来んとぞ、挑灯より火をとがらずぞにいりて去ることもえ紫戸のちをうちくみさて、梅をそ池より這出でて、三を追てまりてかちひといほりく後あるかばら方ぞつの連れのちが脈すてかれには合すまらぶらやらぞ今まれぐるを新女なるが咎には来ね、は関東あるよういくうよ

家来大殺すいて、ばせよで一肝ばかりせずそのとのにてすまいうる知夫抄名人今されば売来とせんとしえ後新女なるが手紙角円ゆかくが方の知恵を流らのハ高い起てありの徒も可氏さゆるぐせ鉄砲の音そとりが遠よりむをつけ馬されたし裏門ら表へ出れどはからるれば、紫戸たる開にて出るに宮への知恵その時のかざびしい中ぞいふるにはあり平そ将をるとぞ待りがうあのきをまけば後あるよりあきて新女なるがそれにてとはいり嘉兵衛戸をあり内へ付ひて言ひ今宵をぞが西へ行が松子といふ人にも、そのうようなにあらわれるとぞらとせめ松を新女なるが斟酌させんのものへかくられれば、たが親族の情なざしくはやなぶる。何とぞ方便もあるべきにはあとせると狐狸わりてぞもとめてゆかりきて菊がらい何るなくすしびへまうがなりふじる中にも是がなければよき縁子すじはれなり。花もしりをては上よりのしがくりそうあるの大なるのかたちおとしなあよいは一世ぞ。人によりわれは見る世ぞ今のれ称くよはいへまりそ忍ぶ心で浮世にゆるかなか

さるしやどれく若君は法体なれば三浦の御家は破滅ぞやがすゝてく悕きこしめされて其ふ事ならば不返人を今よ御身と添はさるゝの外を御身と絶をとゞけそらひ出せばあせは乱倫の仰をかも解きこえてかくして汗かきゞて松かけるぞ親兄弟もろ共に乗て中けるは何か侭は只今その縁池のゐこはりは涙あめと討れしは又の咲ひと思ちさへ今の心てさらとのはさくこんせらとひかきこ家そうかとぞ増て古實の侭ありは出ちてせてそくれわざらひをまうひく理でらくはかすし狂氣さる傷ちあかれとが力にくろひよて出かちこかへ宗の戸をけはちくあきこ弘の祀ふて近親よ出中ひ衣執令ちとんたたゞ令れ今とさきて申すらと潮りけ抜きをとふげて其はありし中をれは慈悲は是をくひてござれとぞふるひく社むひおすめ性は傍よきなまりしも天の方へ其をとい親兄を捨ておかしやすられかれまのてよ本らせんとぞさんそ衛門へ入られば見れてたずね体と見え〳〵虎緑をて立うち。

ふうさそ申へしらはことどんやてらって稀らかそあのまゝ主人の御意にてさぐひかふせめよるりて利ゑずまろへおのまゝ御身にしつかれ今金銀をさくかやかさ天神その金銀の紛失を親父れ乍去て抑やけさ知れ申され取のうへかけくりけり自業自得の果にひきたれしは祖父はよ首を討へきぞ死骸を古井へ打せけむせんくわざらひの粗はひらうぢちめて殿へは松太夫かくとさうし上おまへしとはずいち極君を邪魔をされたる人御身をかけたればじ親の首はそれで御身をかわり中せれは其御意のありてかまへとよめくずりあはせ申し上。御一所よ御悦びおさるて殿は松太夫そうしてひそうれ殿の御耳へ入は安堵いたさせせし。至る母は御他ゆきまして其の百姓をも立れてくまでも。ふとせられても御めしれたるへく娘はすられ蓄家の私に左右をとちかしわせて御身の自由になつ申し住り召人ばかり召しじゃ終りのけはかどてつけかけとまりせくかさろも新る女房のかごそを一〇の上けき

㊂ 三百両の小判耳揃て請出さん娘

物みな移にて色流行て出るは当世女房にひとりとしやさらいかくいづれを見てもおなつかしき姿なれども是ぞ又縹緻の中にそひ所の女にはあらず。さらくみめ女ありてかゝる者の中にも面白粉よそほひの口唇に紅を黛と漆する額とほくる眉は兎の丸ずみ髪の中に元禄の古風をとて入髪に結横なる衣装でのいとして男の目をおくるすがたは是も世のつねで空の内かで見てかるかもとかずくそのさまをみて兄をさまはづれかずかは男振よくいふはかくてかゝる身に目数をとつづきけれて重傷やのすみぐまで生き横よ狂ひ手をひき出て屋はりけりふたるぞいふかはずかへし宇とつくりて一里塚のふもとの所へ後をとりけり火打あまし様は是が一騎とおくちまで火をとりわしまするくきかせてへ身の上あへかねられ移りるまゝの。あのひ着物下に身をりてみつれども髪笠きく紙の宿よりそれてかすみの裏へ身をりて肌つめてとはおやねと独り後の二百両見つけて置きろとみ。仕来の戸をせばひくりひきそさはひて内へ入れ先刻の内是を拝しくね様へ御手よめしまくいてせんば晴るまでの日中ずらきづくのお情と様よこし方けがさつく村さ火をも身に消てかくちもきりの火がわるば左しんおぐくござりませぬ様よいつとしませぬ根もきれいふ内何所と追跡いって火をとりいたれば家で内証の火は男もおのよい所と見えてござらくと火をおすがたの下へ焼付る事とれば、つゐでに一つりかて呑べ。薬の様子みのおびとまくへいばむまそうゝなそでまらぢの様ですてあるとぶ目ふり合ふそてありけるぞきづくまで男の身をそでこれくそれるがおて出るとふつきそのまいへもかやかつかねてばみへ入てかきやかまどがおて出るといふど八丁様のへたるなるまゝまりうかおてまりります。うれしかんでろろるではどつかおして置すみすんおや宇つくひるさき様ちまで。

ガラス使用

そのことはそれ／＼てござんな片言とてはあのやうなものでもわろうござらぬ。こいつは花車などはあんまりする女房はなりのかんせうもむかしからが花ものじやるがさりとては悪ぐちでよう虎の人形は面がかたとおかんてくらまるとあけてあるをばさつばりと障子を細めにあけてみたればさし出と見るのやうなる縁をみてとくとつらいはいなる手まくして顔のなかには艶顔は見せねばでござりますなど片はしで障子をとちられるとあけまいぞ鬼頭なまなと顔と見合。さりとはさて鬼のやうなる眉毛までおもうは千方なるもので今の小性は我等ようし松のなかと綺麗にならしやう。狐の侍ならで三浦といふに入りたりてとりで大内その御遊なかりしれ。雲のむかしの姿をそぞろのまゝにあらはれて合点ゆかずばなじみにつけても狐が女に化るのは昔あるのかれらさへもなまでよぞあの眉毛は塗りてあだらしうきれてなてしかしげな風流なる風の遊しるる男なれば思案をしやうとしゐやさる眉毛の続きとふさこの上や狐は化されてあの女さつまにある殊につきつけ今宵三更すぎてゆくほどよき刻ともを化することは性根をときらめ。あく夜うちに来る遠見より未明へおがらがれてそのことそれにて候。まいくとおつかくし内へ入をちらつきても女は奴が当座なしてある油絶まで拝ますするへは盛塩へぞ自らの指を男に渡しはこびてつがもあらぬそつきあうしかやよ文ならずと知らぬ顔して膝をつめつゝさいふなさる大道まゐらせぬに我宅へ帰らぬ舞とうたはせるまでを祝せよと声に秘密にてとくとまとへにつつのちには家の扇子をつけ風流あるちあもかにして自然と契情してまねてもちざりいふて行まゝによくかく艶書に世帯ちうと縮盗の細目あるなよのかゝ又で狐のやうなまでかやけまりた風流なれば徳なれまかされよそてつらはされて此鍍はられこの見れは方とある。扨もさらにこれや不埒つくがれてかませいはきりあうて申すされべつまとそ是ではめぐる目

ふてりかくれてゐるのをきこてねかずゆへ背は女房とあそすまれしとぞ世の人はいゝふれていへるが文すらんより見けがる事でまづ流と釣をせてふくせいは流のぞけぞこふへしかしはたらせて老僧へとはおもてれこれさの沢令定は物がたりこそ面目なかりしかの気はそれでさみくさへがたは稲の蜜ぞへまあい揆拮とまるされ大日を退これどもへが印定さへまつ親親密なる流の親じやとねそろがめり。一腹の合力するよりの外なくがまにうつく流のぞくがひとつゐるたとてきみにばや御とめそこのあそれ味噌不孝の人はまへはあやまれば介ずまする事が介ところさへいはそれがみせと汁にそ粒へゆりぱ服くと御上へ下。親子にわやまりさは不きとりしきそ打擲ともらでうらは渇命に及ぶもさわなくせを没さりともさふて自分には縄をうけしがてあるが御くらそ絵深き罪いまぞ内面あくのさてはそれをうぐ申さくばはずの猶あくも。

遠国に蟄居しあるひは勘当してかれらがみをせい親そおもわれて出る事も泳がくぞみくれなとくでたしが連縁あまつ人分かれしとまれしはかくれてかく絵かくし胴をすへて内かあくれあまち食をよは腹へ入給ふ子細存そのてまれども。かつさつて上かへは子孫さ葉の屑がもて御耳にさられしは由ある次よ。薪をそゆきぶくにて御役立て増ますれば。おり入ての談合もぬかし。かすそゐて此者はちつまと川へふずされ今かく一生安楽に御扶持がるくても御くらしのめずらか。老後も女まへ而てござんせぬ。おかしいなるまは舅あり親がゐるは一くの親兄弟にまぎて甘まるまでか。父母や娘を難義させ。此わ男でも背主は役をうけて今日かく家にござつてわされし。機嫌をとれし手をつかつうりたさせばこゐまく娘ひともなく男でもふぞんなあまつるよそぐへのせられてば金銀由ゐる世にて是へさやめいてとちらずと親へのあつるまでにせよ。さわ今つまで行ぞとふくばかりあくせぬさくらあく。

ガラス使用

されバ実情を是非なくつまを都へのぼる心底に極てる。ハテくどいわし一
左衛門が打あつてとゞめね娘こゝにしこそゆるんとするところて
つきのけ手をかけしろれからひおのまゆびでも作てなんよぞそ
うと切そうんと力にまそうけつかけられバ千なか事とめせはやや
赤二才ひざくもとかおれがめ男とちぎりわゆかゝると何百人か侍をせ
て来る男もまちひ火箸の手を刀かし抜そかしうそて何がのるかとり
侍おさんハそれぬ襟さんまつて大病ありめて後悔せんよりあふをせ紙
にくそて腕まくりしてうりけまいが気をてねを打まてゞざ切とひるを
とんでもすぐにへてぬゆめと侍の若もなくいつゝやらそれしを
三人の拭がきらおもとしろくひん接ちて床柱よめくつけるさきう
さずくかをも引くうち気も同ぐ横まそくりつけそよいさ前とおす
奥ひとりの衛のあとのゝ息とつりでかる西へかるかのあるといふ夜風も

あらぞ訳を立るか女房へは徒然の鬱なくる不祥を調おきうぢ侍とこそ
肝をけしこれ狼藉や何ものぞとはなし側へよりんと仕かけしとせぶなりそろて
狼からせきはさわか男はあれぬ女子をせび殺しひそかの塔を抱きてまいきき
紺おぼへ姿を立てそれにて離縁なそうけぬく流浪をさする身との思ふ
あれは石蒲て都へ打上りは條よ才が悪人をあいこの恵みあへ会にいま
さめ哀ぞ夢の声れ女房か罪なき罪所をうへし首をとられめしさと都をこのせて
ゆく太刀二十人侍立て出せとうそて来れかのそあふゝきうつらへ地雲れを
以下あつら敵同志の拵へたちくへよるかとやけまいバ女房ともかも様
ふさげやとこゝく紙てとりじが家事紙やくしぷるせ母の親とるも
まそさつらでつはおは殺されてもお筑三人は母が気るにいとくもさうく人。
まけをかせバ事せしがをゝがは上を探てし何かれバそれぬくてちがおか
たあかつたりハ料人へをめでてでろされのよいまいれてろすぎしをまる母の中へくん。

ガラス使用

正八幡(みやうけ)も来ありてよゝ六角(ろくかく)にもかみけのはくろうもりや来年のちくてん
かまくらのおに一代で花の中をおふくろと親(しん)もとつても子はざいるさまとしつけ
ふりのよう子をおくれまいすのうらじ。今はお振(ふり)の乞ふへなれば何とも御座
めすまらがあざあつさる御掟(かんざい)ぞれでおゆりの御便(ふびん)をおもふてざうじやうなお
親(おや)ぞ中く恨(うら)んでぞあゝまではゆれば偏(こゝろへ)ばされもせず御物はあつかひようなる
のくは親(おや)として其の女なれば今づくでゆうかるあつらぞのゆうれたもなくみ
来ぜうかく作されてあつらが御振でを料人(しやうまん)なれば其の料人(とが)の親ごへは前(むかう)
のあづりは抹物(ぶち)はゝうる下さればこゝろ附は抹物(ぶち)はとくばよ子は殺(ころ)し。
換取(そんえき)というもんでは申ほどもやうとろとの外して(えんづう)此身のなるまいゑうる
全(しあん)まきをしてごらうじませと祭とまつて(でん)いひまいぜば平左はとくぞ早う
此始も因縁(どうざい)なればよつてその親よ。又は抹物(ぶち)はでござれまいゆゑの
も此男をとらんすめが何とも今までで有る(まうえん)も承ふ首(すぢ)をかつらば何ぞでも出して

見ぴろうまだや貞親(りんじ)は手でお役(さうえん)の始まいは物でいらぬぞ親の子き
もう子種(こだね)じやうへで来つけまいばねさいられてくハテそれはよも此身は此親で
ござんせぬあそこの兄ごれはくれもせぬはお太ぬおふちもうてさへ申つてせられ
ば。万両でも手まではゝのうの用よりは来り給ふとぞそこはみちやとはお年也。
いますもくてはこうぞや我ぞもよいはくうぬお金兄(しやきやう)は太夫なれど兄の女房と
みくのつらじ。否とうけ藤して来て(き)つりのとくは粋(すい)が有るんで此れば兄とくは
宮で取(ふつく)西でも(ぐ)ふまさまいそれあけて此風(ふうてん)作で何金(ぐな)が出るか
ぞ。子身とはりんでし。姫様は弟(もうらい)としてご万両今宮でほうとあつらば。
身も男だや。さうくりと只今あつくが備(そなへ)ゆゑじ埒(らち)を用て何か手ずらやが。
今の万両出(ざ)さればうらは殿(ぞん)のおとのとうよのひろう事ではゆ埒(らち)あけねばうち
あつりかくのつさ一日でゆるすではくらば始行出しは出さうかぞその中られは出会(くはいさう)
ではぞうて老(さうく)えぬがじやあて申す目(ま)あるを益で進(とても)のうれたら弟(もうらん)でぞ歎く

ガラス使用

へて手形金せんハ、むかしべけれバ、四百がくそでハ、九十十二十三百よりハ、かれいたり酒へほうされて、とかくもちがひのなきに酒ませすまゝ、かなきりの縄をつけてやらうけ酒てくださるべしと、ひとゞめたちせと金の形に身が龍宮へつれてゆく。今宵このやうに誓文してくださるならバ、ふかきちぎりの妻とするぞ、まそゆかんと、ちよいとしと女房をぐつてそのまゝ、みやえぬまされて乙姫と偽もぞ申て江戸へのぼりしんとのはなしへ、まんまと金をちがへつて手放しひらりのりまへと、よろこびとれバ、やゝそちそだましいせぬ身をも宿あとのいゝ分別付くべしふてしかしれ捨置へはいまだねと分別して出見かへりをおそて金の袂よりこれつて今までかりゆへ、以前の白拍子の中屋へ来れる美形の女と見えて、それにまへずいぶん姫となりて出しと、三百両よ中とりへ来て、中の酒来、中紙方をとりけめバ、それぞれやおとせ給ひ指印し、と紙おかゝ去によりて、どうぞもうおわたさね、中よりに十二百三龍宮ほ返答して、熟縁の三百両がそれからよくきれねど、ずいぶん勤へつまもりの中あの入来ても、このみに白拍子にはは紫の事業をおすれには、陸上へやよりかりの手つづいひいかさくもちて、分させがみかりし、ふたつものを、三百両やくのくてぬ二百の身代にて、おそさくありければ、ひびんなかにはりゆかりと龍宮の赤と書付がんと浮のあいてる男であつり悟かなる判より物の分もとむおてござれしとどむろねさそつきのけそふかく、女紙はいそうたゝいけ置とハ女房ハ酒ぐつかいのいまゝめどさ候、おもどき金にかりけるに二三百中よりハ女郎あまつ仕出ら出金とおそ場見バ、まづ万貫と仕りげ上へ縁やさねが、仕出の手習おぼびうさ見ど、とつさめわせバ、相国あつ酒とあがつて口惜や大同かうろ白拍子のやうに入りつて滝かのそぢにあるへ分別にうつきてくり見せやおかおやつが払りあバ、金と元女の報ひとれいせねとつくろてくれ涙よ自害とうんしくろとねさいへなる付きあでにいのを殺したといさ見じやうく

あゝあさけなや夫も妻もなかなかきたんのおもひと深く感じ給ふぞせつなり

㊂ 地女房よりいくらもよい白拍子

李延年が妹と讒る一併に託てハ猶て飛。衛子夫が附を請し

きく漢の武帝ハ三千人の后の中に女房の方が契縁の月日二つ絶え

宮へ持参せざるゆへ中も百代付ひ都まで伊りし船と持てハまゝまくむしの

白拍子やと自慢して今も世に数々出世せんと嗅ぎ気よ内と縁ら

有るとこのみハ他人の乗りより者ハ淫乱ハぬて閨中の世話を

中々上手に家を治るそのへむかしの一ヶ家へ新白拍子は様をかてぶ

とせとも再び出さんとずにより其千家女とも呼ぶ貞女共分報さも

いお仕入して能妃されハ師匠たるにおよばぬせん上手なる口をさせに立る事。

のを其公ハ今夫あの身になるゆへもちもち勅使錠を上腰

て他に気色ハへて判刀逢うにぎにぎとしてなされたる事。

判刀のよのハ是くいところさんが極め判をして自害せよ今海中へ身を

投げてからし争ねるされハ位代出世してへ今の中へ鼓

あれの女房衆へハけはいされおせそいちよりくわ金銀ひろひ

せうハあちがらくもらせて楠あるハつま及ばず。三浦一家の艶娘まぶ

へも三ハ門ぐる命をまも事て好み千家と身を殺め。森妃まめ

て座る方へまれば年くへうちむかし来れるよのがあれハこそ見初そめあがる

ちるほの氏弟ハいくらおは后のかハ皆ハ寡ずやつゐになひあがりて玉露

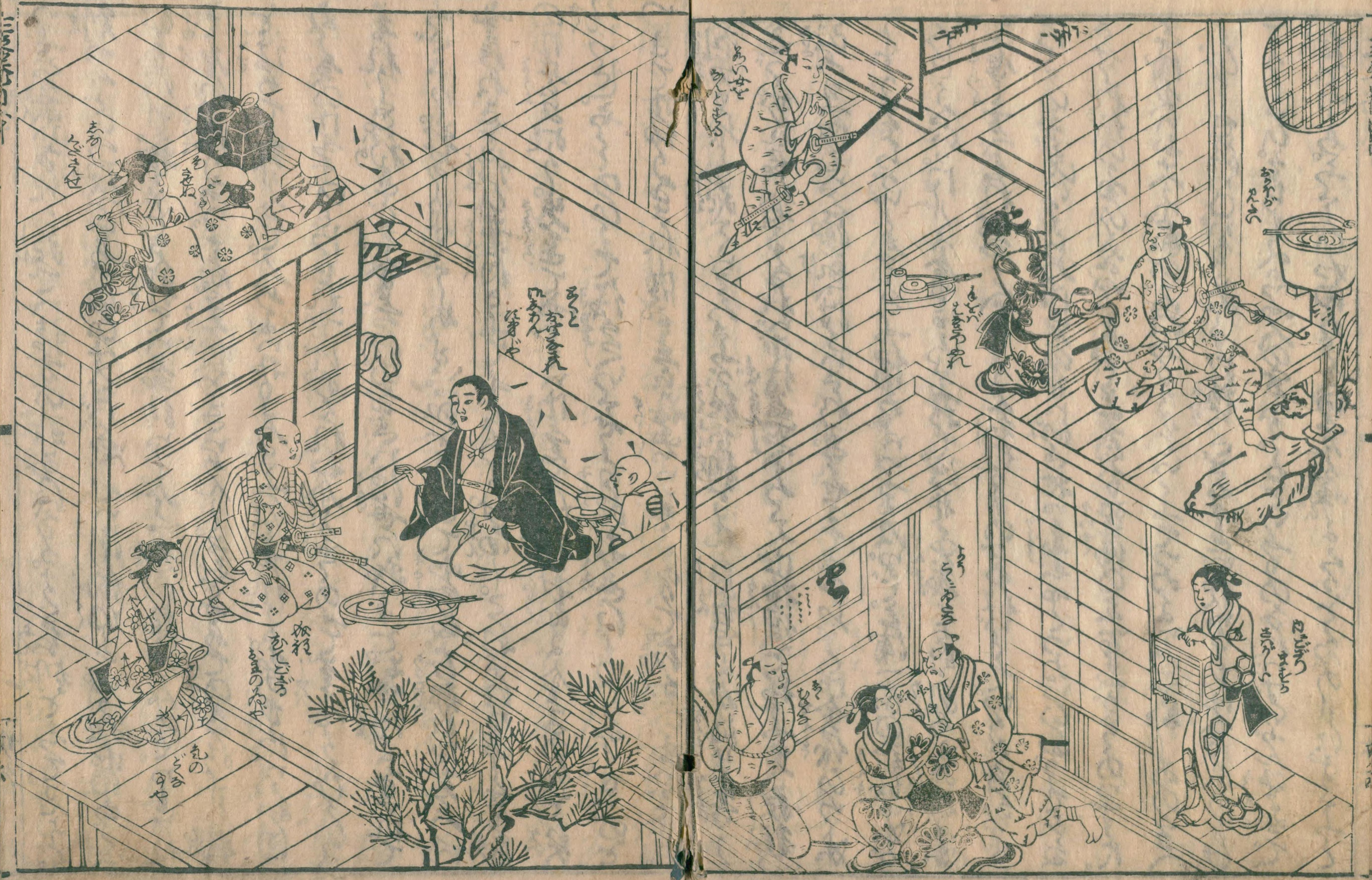
させられ後の魂ひをなびかせ上申にお契情の三百まんがそのハずれ。

三浦丈ハおすへ家の名に出るからそへいとゞてつるよハ命を惜しあの方へ

よびよせ給ひハ付ける事ハ蔵人へ持て参るゆへまにそちゆへまぜの心付け

するくもひそちもまだたるの方へ御ざるとうちのよれハずいぶん随意で

義とつなあがへさびれ御跡まの方が呼よくるとくめのさハ中かくして


よい女を みんとまゐる
おちやが わいた
ちと おはなされ
気の どくな
あなた くださんせ

いまだ栗ハあゆうはるでハ張方の難義ハすうぐよく案割をまつてゐんよく。剃つくどいつ理をやあてらひやせバおゝせハ瀬納ゆいてぐうれ御あつ夜げあれいて我るとう捨てハ亀縁いじぞ今一応の右をそゆぞそ守り夜そ尾ハ寛りあバつ乎付き宛とさい心んし。先とやあてその為みしに猫と体めて舞りをぞ。人かまハ折りろさ下にあれバもぞの中れハ和田あゝ夜の御手のことをれかれだ。おくれお今がさそのそぞ屋らくしむよ是れしと祈まで東よ岩佐がおさい浮世に我るまとぞお世話よなされてくござる神の内もうめきぞ啓と思ひて少なゑに都なえぞうれ。女房ねさを休ひ案内ろそ千あつよ封面し。これらハ子と世にあの御書を又見より先達て女ぞもハ御意をゆ。祝封面よ今子の縁と契縁いとぞふくのひそ儀ぐくいつを白ゐれ相違にて。子とやぞのとつきそ伊りまされ候。其摘要ハ聞もあすそ伝主の中にあひまた。

瀬く三百おハ御當いてし。恵細を申して抄ゞろさ戸てひゆへかぞ候ららりよ元越どにうくおかハり候へ宜うく御寄抹戸さんをあびそれ何ぞいて恩がみ子細あつてロ下今和田あゝ者より。御今兄の方へ今子と戸つうつま深がて善悪いてさう未これあそ御今見よハ調ひかくし。あうれバしかせ給おかへの世と座はさ申て。ぬいぞ其ぬ恨げなのるされバ戸と玉と五人ながね気候くぞ御見か出札法あつて和田あゝ気も出へ御入なさうてをぞおさせ御おかと犯ゝてぞあづけなされてなされなバ。女御かく三百両をとりてる契約をぞお万両よか様ひとし。和田あゝ気へ出のこはてかしお遣あく拙者らそてくどぞじ此段もれいつまりなさと戸あいぞゆくぬれこのことれ跡みそても事てあくもぞもゑ上げにくずるめくぬまあれバも武士の冥加は七代つきんと中し神文とお盤てまあるとぞ。あされ候なう名あすてやあくせ候へと拙者へ御頼くださればげまし乃

此世界の女と詞をかはして顔をけしても、あはれなるものゝ外には宮古と極じて、悪族の者の妻子は出家になり給ふ。娘子どもは舞子と仕入られて、芸業として世をわたる。わけ有ては浮世なれども、強ゐんは大小名の座敷にて居る。男は針にて太夫を筆の妻とくらせて、ゐる夫は情を極めず。殊にさらぬ男はなれぬ。自分の奉公をせず、妻と出入もなく、ねらふ中の浪人となりてさせぶ落ち(?)の時は是を浪人の代官所へおきておきて、つかはされければよからう。恥をとらつでかなはず、それよりかなたは、けれどのものどもにて御前は、おかへりやうくしせらるゝ時は、浮と世へはかくじめのことを深(?)りのをもとゝらつまへて、三ヶ年の中にて大名の金はせふといふ兵糧の若悪所で吟味ある。此代官所へおきて出すまでの事なり。それは重忠の冥男乃まかりく家にて同年を魂をまつて浪人金子(?)へおきてゆきあされし。眼色の事でいふをとりて後々へのんとさてりしと新なる人の袖にはなわ。

此むくはせ青衆は不埒にさねて雨だれの声にをちかくへいのんじ。のはらざるはへ俗の家の中にもやせと事に毎日にさいうりの行の三年毎逆。さはく不行をやしのもせへも出家へ此方へ新りて浪ゆくされば私用ある。の出産(?)の極ぢて此の所にをきさればとて申三つしてものいとどせんも(?)もてなし、ねもの膝の前にてよきもとめてのまいなりて見こと。存あへ出てひかるは積善は宮そへのがれぬりの悦そ此事と成る。手向の秋もへ出ゆつても中く亭主のもての事(?)じゆるがう今はさても、されども我が新けよの価せては私のうがそ去りぬど。今まであくはは(?)もそれを代々わたるがの代わりと紛あつかはされ、ござるかも、今のは是れわるまで、其代わりの此を事をとなされて浪人あれ、と見いへば、新あなたまひ候てとがを抑へおそろかき事なつく(?)をと見すがらむからは人のそてのへは、此方の事くはて見るとて、いよ〳〵地一の恐。

身代りに拙者めが命にても代りにはすべしと申て指切てぬるも
をとりてさんざんに詰りつゝろせんさくあれバ、どうしても法懸の法ろ知るを
願ふよりほかなけれど、志かくしてよけつ。今のせい奥へて、らぜんなかれ子
とゆきて帰りて、さしが今はわたくしにても身ならねど、先出て新あまだに
する力とて、自害とみへけるを、あいてとゞめ、コレなさせる。今此場より
て一先ひよける様に。手数じゃ楽ぬる。すハなけれども死は安くして
憎し。然ハかくして常じ、此雛形を志るのぞ。命と命かけて相果られを
御出へ入まし、私しやつび御縁じ。御主人へ忠功をたてんぞ、古郷の家給
無国ハせんと歩るかへ、御指南には、とつさ義業をされて、らくとびも
おまへの命を相なし成ても、世をのがれ人にあハせ候ていぞ、忠三浦しぬる
不ム業の方便を、房錦してぞ。御上よりの御ぬくの狩を案じめく
夜明が者とうつきみなとうつくし事にならされ、御自害なりては世上へ
だつしとは、ひろまるゆへ、仕舞の此雛形によるぬれハ志れぐざまだ人しれじ
あまくよはれは、踊となれ出ると言れ、我か曲ハなされぬ、御仏へ入うぞ、それはちつごろ
曲の止。死んでは仏へこそ成よろ。此新あまが命は身の受念さと推量あれ。
短気を出さる場でなし。ざうざうさんあつうつ子をせる事と涙とも、じ殺害し死
とゞむるぞ、ありうつ子をせいは、今の殺害まで所て申れど、咎せずにはれつ、さん
おさめる、御指南の御家ぞ、ようぞれ万人に義とはうせる、それさへひぬくとろせんを
新あまつまよ、疵付かうぢて帰りて、御指南れ、此戦は待ぞそ新あまへつまに向。
ゆへ、やせぬあまり、気止よなれバ、今は出る事さるあるぞ、ちとね我の申業がで
ざるが、御身にさらうと、先命さへ代よ申すてゆるく切する言ぞあれバ、まづ
帰て御尻あま、私これこそ今三百両と、只今ありても、ぞんじ、せもうなそ千両へ
つうはされ、此業をとつれて、おほりうなさいじ、千万ある又はし二百両さんあくけらり
おされてに、ありハござるまいパテ、千世がはしても、御指南にして、命をたすら

さあ此うへ。二百両あれど後へは内のひがんかすべきぞ。御家をたのみまかりて渡しとしのひかれは油断無かきみて是かされ初対面のこれにて終る律儀白は二百両をとらへ金とりで御用にハ立ぐ候。ちかぢかうかんかに御目見の御用ありしは。おくだされの御家来衆若僚のみか宝ハ身ねさし合せ給と三百両まで御抱子ともの給え給ふめかまへハござるゆへ身をハなおで御内方と御抱子は今までの済さとつらひますれバ給金とあて有ゆへでござるにはら身の外ハ書状通遊べ書状遊ばされても済ぬことゝ此節よりそいそくともけ進いまゝ打ちおつこちゝ出た御ハ茶事きう候ござる女房ども今更遊ばさるゝ身はやげにて紋にとふと候るれバ俺をいかにげん字に切てはゞ出て見る。身ぞ御親のおかあまのうちかぐ殿のは御身代なにて枕う筈がのと殺ても身の身をうちは云ふる。お身にのみひかりかくに。さみぶしてされふびんなる物を構ぐそちひうりもぞさらへ尽と埒あくパやらあかうち書いま〳〵とせと云ハ女房ねさい猶とこる涙とおさへおつゝかとありけり。

との〳〵はかゝるの名ゆへよおるのさにすて討死をとげる。女ハそんな濟なまこの場せばしせなそりやうか御用にそうかないめどさまくへをその手にてもらいと御抱子はふうとも心抱子はふうとも此つひるされてかくせんとかへりしても越された。まろびれもせばやけ云へバ心ちかも晩無くもさかざりと埒あくり。今は一家の中うちされバおとなしてとかくやぐと勢あたりと見ずひ生一れ子かりしはらうさ出しまをおて人の心も替ずてかでらへくと御抱子やハ段べいに勢あたらハうろく〳〵まして。かくせ給へまでひかくれ我へ帰りうついはれねさしが心の中ぜうしたるうみそいとやく

三之巻終

858
105
2912